

# 踏み跡 <My Mountains>

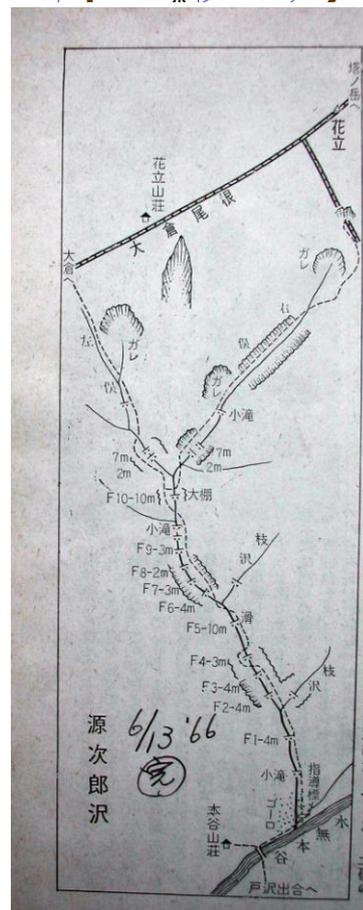
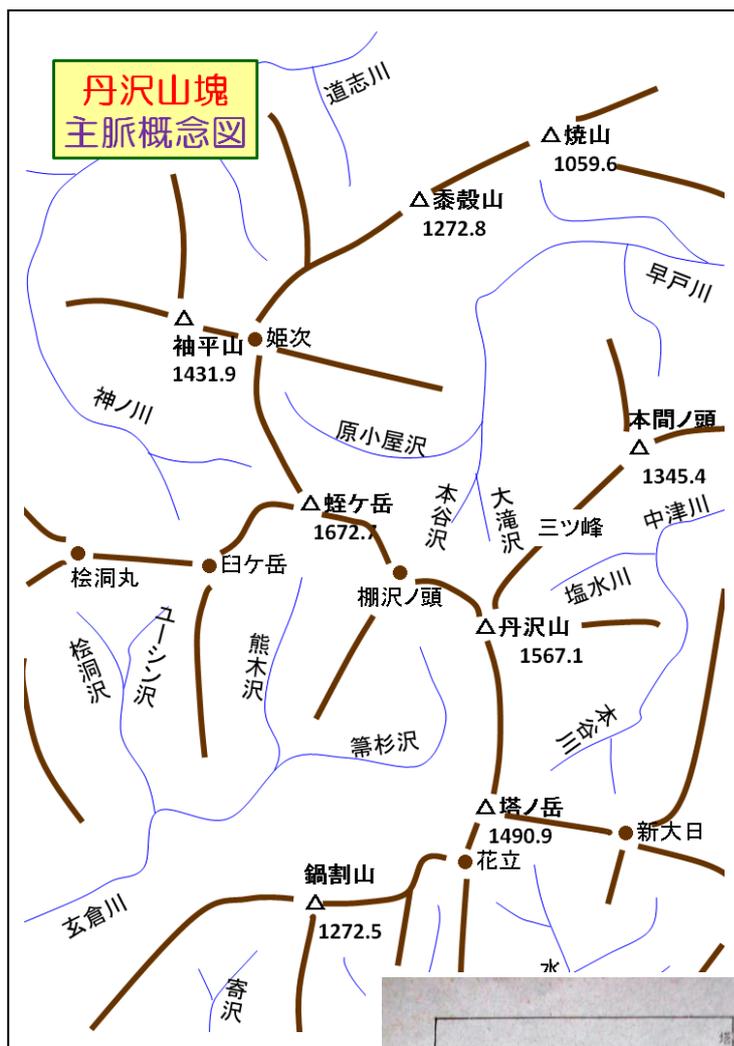
|    |              |        |
|----|--------------|--------|
| 丹沢 | 源次郎沢から入り主脈縦走 | No.153 |
|----|--------------|--------|

一般に、登山の初歩段階を丹沢で歩き始める人と奥多摩で歩き始める人とがいる。登山歴10年になるが、その初歩を奥多摩と奥秩父に求めたため丹沢の主脈縦走はやり残していた。丹沢はどちらかという沢登りに来る方が多かったせいもある。天皇誕生日の日に守屋山へ同行した女性二人に石関が加わった。(彼は途中から合流した)

昭和45年5月23日  
 天気は晴、小田急線新宿発8時19分の急行。会社の女性(赤坂・服部)二人が同行。渋沢で草鞋を購入。大倉行のバスは一時間ほど待たなければならぬので、大秦野行に乗り大倉口から徒歩。大倉に10時15分に到着。素晴らしい天気です。夏を思わせる太陽。ポロシャツに着替えて出発。戸沢出合いまで行き、昼食。12時15分、すでに表尾根は雲の中に姿を消している。水無川本谷に入り、源次郎沢に入る。入山ルートとして沢を選んだのはバカ尾根(大倉尾根)を登るよりもアプローチが短く楽だという理由から。F1, F2は気がつかない内に通過してしまった。水をたっぷり含んだ後の草鞋の感触こそ沢登りの爽快さにつながるものだろう。

F8を過ぎると沢は崩壊した土砂で埋まっています、以前遡行した時よりも川床が高くなっています。滝も同様に土砂に埋まり、落差が小さくなったり滝の数が減ってしまったりしている。F10を過ぎるともう水流はなくなり、ガレが始まりました。柔らかな砂の混じったガレをトラバースする時、赤坂さんが10mほど滑落してしまいました。尻で滑ったため顔や頭に外傷はなかったが、よく滑りすぎたせいで背中と脛に擦り傷ができてしまった。あと数m滑っていたら4~5mほどジャンプして大変なことになっていたに違いない。我慢強いのか平静を装っているが、かなりの擦り傷のような気がする。嫁入り前の娘さんに怪我をさせてしまった・・・(という訳でもないが、この手記をまとめている今では私の連れ合いになっている)。そんなアクシデントを経て16時にバカ尾根稜線に到着。まだかなりの雪を付けている富士山と、かすかに海岸線を見せる相模湾とが印象的だ。花立を通過し、空腹と倦怠感の中で17時10分塔ノ岳頂上の尊仏小屋に到着。夕食は鳥の手羽焼きに野菜サラダとワカメのみそ汁。食事の後は頂上から三浦半島の灯台の明かりを見ながらハモらないコーラス。21時に就寝。

昭和45年5月24日  
 深夜1時半頃バカ尾根を登って来た石関が合流。4時半起床、やや曇っているのが気になるが・・・。朝食は豚汁を作っておじやと雑煮。



## 踏 み 跡 <My Mountains>



8時半出発。丹沢山、不動ノ峯と進む頃には曇りがちの空に薄い日差しが現れ始めて来た。

蛭ヶ岳山頂で昼食。丹沢の5月はもう充分なぐらいに春になっていて、木々の緑も明るく楽しい。

幾分曇りがちの蛭ヶ岳を下って原小屋まで来ると再び太陽を浴びながら腰丈ほどの灌木の中を歩くようになる。

原小屋を過ぎると姫次原と呼ばれる平坦な尾根が続く。「ヒメウツギ」が転じて姫次となったという話を聞いたことがあるが、確かにヒメウツギが少くない。

東京方面から丹沢の山並みを見ると、蛭ヶ岳を境に右側はしばらく平坦で、次にあるのが黍殻山。遠くに眺めて来た稜線を自分の足で確かめることができる。目で見た曲線を足で確かめるのも山登りの楽しさのひとつと言える。

黍殻山から主稜線を離れて東野へ下る道へ。服部さんは疲れたせいやおとなしいが、赤坂さんは怪我のハンディにもかかわらず元気な様子。

東野への道でクマガイソウを見つけた。植物の世界は面白い。熊谷次郎直

実（クマガイソウ）と平敦盛（アツモリソウ）とがいまだに共に生き長らえている。（下の写真）

東野から藤野を経て中央線で新宿へ。新宿着 19時と早めの帰着となった。

以上

